

『お寺の学校』 宗教の時間

お浄土 何一つ無駄にならない世界

■別離なきところ

『阿弥陀経』には「諸上善人(しょじょうぜんにん)、俱会一处(くえいっしょ)(もろもろの上善人(じょうぜんにん)《よき先生、よき友》と、ともに一(ひと)ところで会う)」と説かれます。今生(こんじょう)で別れた人とも、阿弥陀さまのお浄土でまた会えるという意味です。

人生は出会い(邂逅(かいこう))と別れの連続です。私たちは一生の間にどれだけの人と友となり、どれだけの人と離ればなれになってゆくことでしょう。知りあって忘れ去った人は数えきれないほどいます。また、死別はいうまでもなく、別れた人のなかには、いつまでも一緒にでありたいと願った人もあったでしょうし、いまなお忘れることのできない人もいるに違いありません。

私自身も昨日の私と別れて、今日の私に会うことを繰り返して生きています。24 時間、片時も離れずにある私自身のはずが、つねに新しい私になっている。人の一生は出会いと別れの連続で描かれた軌跡(きせき)といえるかもしれません。

有名な『平家物語』は、「盛者必衰(じょうしゃひっすい)、会者定離(えしゃじょうり)(命あるもの《盛者》は必ず滅し、会うものは必ず離れる)」といます。この「必ず」という言葉が、人として生きる悲しみを深く教えてくれます。しかし、そうであるからこそ、「ともに一ところで会える」というお釈迦さまのお言葉が、いよいよありがたく頷(うなず)かれていくのではないのでしょうか。

親鸞聖人の師である法然聖人(1133～1212)は「生生世世(しょうしょうせせ)の父母、師長(しちよう)(先生や目上の人)、妻子、親類縁者に会おうと思うのなら、極楽浄土に往(ゆ)き生まれるべきである」と説かれました。お念仏の教えをいただくとき、人生において出会うすべての人はみんな、私にとっての上善人《よき先生、よき友》です。

「いのち」のつながりに気づかされるとき、互いを敬い、ご縁を大切に受け止めていける「何一つ無駄にならない世界」が、いま、ここを開けるのです。

「2021(令和3)年8月1日(日曜日)本願寺新報」